

「セーフティネットを救えー『貧困』は自己責任じゃないー」

湯浅 誠

2007. 8. 26

NPO 自立生活サポートセンターもやい事務局長
反貧困ネットワーク事務局長

1995年から東京で野宿の人たちといっしょに活動をしてきました。最近は貧困の問題で発言をする機会が多くなってきています。リーフレットが配られていると思いますが、私が日常的に関わっている活動は3つあります。

1つは「もやい」です。生活困窮している人たち、野宿の人はもとより、DVの被害者や精神障害者、外国人労働者の方などですが、そういう人たちがアパートを借りる時の保証人提供と、アパートに入った後の生活相談をしています。6年ほどの間に、アパートへ入る時の連帯保証人になった方が1、200世帯います。生活相談の中で多様な相談を受けています。それで生活保護の申請に行くことがこの団体の枠外で多くあります。最近言われているネットカフェ難民の相談も受けています。

もう1つは「あうん」です。野宿の人たちといっしょに仕事をしています。野宿の人たちは、仕事があっても仕事がありません。じゃ自分たちで仕事を作ろうと、いわゆる労働者協同組合的な事業を始めました。今10人くらいの野宿者や元野宿の人、生活保護を受けている人たちが仕事をしています。今年は4、000～5、000万円くらいは売上げられると思っています。

もう1つは「ホームレス総合相談ネットワーク」です。これは法律家の団体です。野宿の人たちや施設に入った人たちの法律相談を行う団体です。弁護士さんや司法書士さんが都内で50人程登録してくれています。2003年に発足しましたが、今までに2、000件くらいの法律相談を受けています。

私はそれぞれの団体に関わっています。「もやい」では生活保護の申請に同行し、「あうん」では家のリフォームもやってきました。私は壁のクロスを貼ったり、水洗トイレを取り付けたり、ペンキを塗ったりできます。それから「ホームレス総合相談センター」では多重債務の相談が多く、私もある程度の法律相談ができるようになりました。

今ご紹介したのが福祉の分野、労働の分野、多重債務の取り組みです。それぞれに関わっていますが、特別な意図があつてこうなったわけではありません。野宿の人にはそれぞれが切り離せないわけです。DVや精神障害者もいます。野宿は、究極の貧困の問題です。貧困の現場にいとそれぞれの問題が固く結びついているのが良く分かります。現場でニーズを感じ、やらなきゃならないと思いやってきただけです。

不幸にして、ここ数年、世の中全体が地盤沈下してきて、私がやってきたことが野宿の人たちだけじゃない、相当多くの人に当てはまるようになってしまった。野宿の問題

をやってきた自分からどうやって社会一般に広げていけるか、この経験をどうやって活かしていけるのが、私の最近のテーマになっています。今日はそこから見えてきた問題についてお話をします。

多様化する相談事例

いくつか事例を紹介します。「もやい」の生活相談に来る人たちの話です。

野宿している人という、おじさんを思い浮かべると思います。中高年の単身の男性です。それは実際当たっています。今でも過半の野宿者はそうした人です。ところがここ1、2年、「もやい」で相談を受けていると、多様化ということを感じます。たとえば10代の若者の相談をうけた後に80代のおじいちゃん、次に30代の女性の相談を受けて、親子の相談を受けるといった感じになっています。私の印象では、どういう人が貧困になるかを世帯構成で、たとえば母子家庭とか野宿の人とかで、決めつけられなくなってきた。あらゆる世帯構成の人が貧困まで堕ちるようになってきていると感じます。今でも貧困の問題を若者の「就職氷河期」の問題だと言っている人がいますが、あれは実態の矮小化です。私の実感から言うと、日本全体が貧困化しているのだと思います。

19歳の男性ですが、先月生活保護の申請をしました。彼は中学2年生から学校へ行かなくなって、5年間事実上の引きこもりです。ご両親は小学校の時に離婚していて、最初はお母さんと住んでいましたが、その後お父さんに引き取られました。お父さんは彼との生活を維持しようとガムシャラに働いた。お父さんは55歳で、日給月給の警備の仕事をして月28万円の収入を得ていました。日給月給の警備の仕事で28万円を稼ぐのは大変な事です。夜勤をやったり、休日出勤したりして働かないと28万円にならない。それを頑張ってやって、うつ病になりました。お父さんがうつ病になったら、一家の収入はありません。二人とも生活に窮して、お父さんが「今から死にたい」と電話をかけてきた。電話をかけてくるということは、死にたくないということですから、すぐに来てもらってお父さんはお父さんで、子どもは子どもで生活保護の申請をしました。取りあえずは別世帯として別れた方が良さだろうとなりました。

彼は中学2年から家に引きこもっていましたから、電車の乗り方を知らない。彼に説明する時は、電車というのは1番、2番のホームがあってそれぞれ行き先が決まっている。2番に乗るとこの駅に着くよと説明してあげています。だけど彼はこれから一人で生きていかざるを得ない。今週の木曜日にアパートに入ったので、一人で全く経験したことのない生活をしていかなきゃならない。

次は21歳の男性。特徴的だったのは、彼のお父さんがホームレス。彼が施設。その後施設を出て、彼自身がホームレスになる。私は初めてホームレス第2世代を知りました。このままいくと貧困の再生産が起こるだろうと言われていますが、私の印象では再生産は確実に起こっていると思っています。

最後に、これは夫婦ですが、ご主人は40歳、奥さんは26歳。奥さんの実家にいて、

そこから2年前に東京へ出てくる。奥さんの実家もかなり厳しい。宮城県です。5人家族で奥さんのお父さんの障害者年金だけが唯一収入という家庭です。食事の時はご飯を半分入れて、お湯をかけてふやかして腹もちを良くして食べていた。二人は日研総業とかの派遣社員として自動車部品の工場で仕事をしていましたが、条件が違ってなかなか稼げない。地元には仕事がなく、東京へ出てきました。東京でコンビニの弁当を作る工場に派遣で入りました。地元で聞いていた条件は、夜の0時から6時までの深夜6時間労働です。トイレ休憩や通常の休憩があって、そして社会保険や雇用保険が付いている条件のはずでした。奥さんはうつ病を患っていて深夜の就労は難しい状態でしたが、働かざるを得ない環境だし、6時間なら何とか働けるかなと思ってこの仕事を選びました。実際来てみたら、22時から翌朝の6時までの8時間労働、しかも毎日2時間の残業。つまり8時間労働。その間トイレ休憩や通常の休憩もない。社会保険、雇用保険もない。コンビニの弁当を作る仕事というのは、桐野夏生さんという小説家が『OUT』という犯罪小説に書いています。この小説の舞台は東京の武蔵村山市のコンビニ弁当工場ですが、彼らが働いたのも武蔵村山市のコンビニ弁当工場です。ライン作業ですから、自分だけトイレ休憩に行くのは非常に難しい。その分誰かがフォローしなければならない。新入りがいきなり迷惑をかけるわけにいかない。そんな中で奥さんは4日で音をあげてしまって、二人で仕事を辞めることになった。寮に入っていましたから寮を出ることになりました。その時点で手持ちのお金は13,000円。その後二人はネットカフェで生活することになり、ご主人は日雇いで本の仕分け作業をする。ところがご主人は腰を痛めて、奥さんもますます悪くて、もう二人で死ぬしかない和我々に電話をくれました。二人は今生活保護を受けて、ご主人は仕事を探しています。

見えない＜貧困＞

先ほど紹介のあった北九州で先月、ミイラ化した遺体として発見された男性は日記に「生活困窮者を排除しないでくれ」と書き残していました。去年放映されて話題となった「NHKスペシャル」で、秋田の仕立屋さんの70歳をこえるおじいさんが、テレビカメラに向かって「貧乏人はもう早く死ねということか」とつぶやいていました。我々のところに相談に来る人も変わりはない。社会全体から受け取っているメッセージは「お前見たいなヤツは、早く死んでしまえ」、そういうメッセージを本人たちが受け取らざるを得ない環境がある。誰かにそう言われているわけじゃない。本人にしてみれば生きていく術がないのに、誰も何もしてくれない。これは死ねということなのかなと感じざるを得ない環境が出来上がっています。

こうした貧困の問題は、何も今に始まったことではない。たとえば母子家庭は日本社会の中でずっと貧困状態でした。それから日雇い労働者、ホームレスと言われる人たちもずっと貧困状態のままです。だけど日本社会は、基本的には高度経済成長のあたりから、貧困の問題を忘れたと思います。それ以後日本社会は、基本的に豊かになった、一

億総中流だ、だから貧困の問題は昔の話かアジア、アフリカの遠い話だ、現在足元にある話ではないと皆が考えようとしてきた。

それを私は**四重の否認**と呼んでいます。まず、政府ですが、今どれだけの人たちが「ワーキングプア」と呼ばれる状態で放置されているかを調べていません。これは調べたくなくて調べていないのです。日本の場合、誰が貧困かという法的な境界線は生活保護基準で決められています。生活保護基準以下であれば貧困だとなります。

生活保護を受けている人たちは約150万人。日本の生活保護の捕捉率は、政府は調べていませんが、学者さんたちの調べによると15～20%と言われています。20%だけで150万人ですから、全体では750万人が生活保護基準以下で生活しています。その内、実際に生活保護を受けている人が150万人、つまり残りの600万人が漏給状態にあります。生活保護の問題といいますと、不正受給件が騒がれています。その件数は16,000件程度だったと思います。他方で、600万人が漏給状態なのです。

これだけの漏れが現実にあるということを公的に認めてしまうと大変なので、政府はこの40年間、捕捉率を調べないで来ています。じゃ政府が悪いかということ、そうばかりとは言えなくて、マスコミも貧困問題を長いこと取り上げていません。フランス人留学生の知人が、朝日新聞が1990～2002年の13年間に、どれだけ貧困を記事に取り上げたかを調査しています。その結果、13年間のうち貧困がタイトルにあがったのはわずか7回で、2年に1回しか掲載されていなかった。2年に1回では、人々の印象に残りません。マスコミもこの問題については忘れてきた、無かったことにしてきました。

では我々市民は貧困問題に関して意識していたかということ、そうは言えない。北海道大学の青木先生が、市民の貧困感を調査しました。その中で、「ホームレス状態にある人、路上で寝ている人は貧困だと思いますか？」という質問をした。答えた人は、民生委員、児童相談所の職員など、一般的には福祉や社会問題に理解があるはずの人達ですが、ホームレス状態にある人達は“貧困ではない”と答えた人が37%、思うと答えた人が25%です。ホームレスの人を貧困だと思わないと回答した人達のほうが多かった。つまり市民も、たとえ貧困が目の前にあったとしても、それを貧困だとは思っていないのです。

そういう社会の中では、当然本人は自分を貧困だとは認めませんので本人自身も“頼むからそんなことはいわないでくれ”といって否認します。誰もがその問題に触れない、このような状態を続けてきたと思います。

ただこの1年でかなり状況が変わってきています。大きな変化は、NHKスペシャルのワーキング・プアシリーズです。放映のあと、「もやい」に取材に来る人達の量が変わり、月2～3件だったのが、週に4～5件の取材を受けています。このような現実があることに皆が驚いて、そのことをもっと知りたいということで人々が動き出しています。

朝日新聞では、この1年間で過去13年以上の「貧困」というタイトルの記事を掲

載しています。その意味では、「貧困」の問題については、大きな変化が起きています。しかし、現実には、それで何か問題が大きく改善されたのか、解決されたのか、ということと残念ながらそうはなっていない。

貧困とは何で、何を求めているのか

「貧困」ということは、どういうもので、それが何を求めているのか、十分知られていません。そこで「貧困」についてお話をしたいと思います。まず、人はどうやって「貧困」にまで追い込まれるのか、それを私は**五重の排除**といっています。五重の排除とは、イラストに掲げたように教育課程からの排除、企業福祉からの排除、家族福祉からの排除、公的福祉からの排除、自分自身からの排除の5つです。

例をあげますと、先ほど話した夫婦の旦那さんは、高校に1週間しか行ってなく中退し、その結果ずっと非正規で働いていました。そうした状態にある人には、正社員の門戸は開かれていません。彼は不真面目だったかという、そうではありません。とても真面目な人で、その証拠に彼が最初に勤めたガソリンスタンドのアルバイトでは、その働きぶりがしっかりしていたので、向かいのパイプ工場の人が働きに来ないかとスカウトされたそうです。

非正規で働くことは、非常に不安定です。簡単に首を切られ、仕事と仕事の間は収入のない状態におかれます。多くの人達は、その間、家族に頼って生きています。例えばパートで働いている女性が首切にあっても、あるいは会社が倒産しても、旦那さんの収入がしっかりしていれば、すぐに生活に困ることはないのです。フリーターの人も仕事と仕事の合間にブランクがありますが、実家の冷蔵庫を開ければ何かしら食べ物があります。親と同居していれば、仕事の不安定さは生活の不安定さに直結はしません。

しかし、家族に頼れない事情のある人は、それが出来ません。仕事の不安定さがそのまま生活の不安定さに直結します。先ほどの40代の男性は、小学3年生でお父さんを亡くし、小学6年生のときお母さんを亡くしています。彼には兄弟はいませんので、小学6年生のとき天涯孤独の身となっています。こうした中で十分な教育を受けられる機会もなく家族に頼ることもできない状態になってしまった。

このような状態の人が生活保護の申請に役所へ行っても「あなたは若いでしょ」といって追い返されます。公的福祉からも排除されてしまいます。

今日は年配者の方も多いますが、若い人は大変だという話をしますと理解してもらえない。5月に憲法に関する集会に行つて話をしましたが、70代の男性のアンケート用紙には「そんなことをいっても、若い奴等は甘えている」と書いてありました。世代ギャップがあつて、なかなか通じないのではないかと最近強く感じています。

多少挑発的に言いますと、ある一定以上の地位の、ある年齢以上の人達は、企業と家族に守られて生きてきた。ひとりで、自分の力で生きてきたと皆さん言いますが、企業と家族に守られてきたのです。ところが企業は今、社員の生活の面倒をみるのは会社の

責任ではないといっています。しかも労働組合は、基本的に非正規の人達を仲間に入れてきませんでした。非正規雇用の方は企業福祉だけでなく、労組からも排除されています。正社員であれば住宅ローンを組むことが出来るが、それができない、住宅手当は支給されない、社宅はない、まして労働組合の共済も受けることが出来ません。

昔、皆が貧乏だった頃、支えとなった家族とか地域は、今はありません。地方都市に行けば、商店街はシャッター通りになっています。昔だったら高校卒で高い能力やスキルが無くても商店街の中のホームドラマにでてくるようなラーメン屋、仕立屋さんとかで働き、そこのおじさんやおばさんが作る家族的なコミュニティによって、地域への顔つなぎとか、住居の斡旋とか、時にはお見合いをしていたのです。擬似家族的なコミュニティの役割を果たしていた小規模商店がありました。今はそうしたものが無くなりました。郊外にとてつもなく大きなイオンやパチンコ屋が建っており、そこに勤めても生活の心配はしてくれません。働ける間は使われ、働けなくなったら切られます。そんな中で家族にも企業にも頼れない人達が増えてきています。

若い人達は、だらしが無いからでなく、家族、企業にも頼れないため、公的福祉に頼るしか生きていく術がなくなった。そういう人がそれなりの数が出てきています。ところが企業や家族に頼ってきた人達は、自分が頼ってきたことをタナに上げて“公的福祉に頼るのはケシカラン”というわけです。これは不公平であると思います。

企業や家族に頼って生きてきた人達は、一人で立派に生きてきたというのであれば、公的福祉に頼って生きていくのも一人で立派に生きていくことです。彼等は、公的福祉に頼っているから一人で生きていないというのであれば、企業や家族に頼って生きてきた人達も一人で生きてこなかったといえます。この問題が、なかなか理解されないことにもどかしさを感じています。本人の気の持ちようで何とかなる問題ではないのです。

人間というのは、貴方は要らないと言いつけられると、そのうち誰でも、“自分は生きていてもしょうがない”と思うようになります。先ほどの40代の男性の例ですが、彼がネットカフェで暮らしていたとき、そこで何が辛かったかというと、お金や仕事が無くてではなく、店員に客扱いされなかったことが一番辛かったといっています。2週間位経つと店員に“こいつは家の無い奴”だと分かり、それ以降あからさまに他の客と違う扱いを受け、それが何といっても辛かったといっています。

そんなことで2等市民扱いされ、差別的な対応を受ける、それが学校や企業、あるいは家族の中で起こってくると、世間全体から“お前は要らない”と言われていてと感じてきます。“死ねということか”、本人の受け取り方はそうなってきます。31歳の男性です。相談に来たとき、餓えていて1週間何も食べていない、聞いてみると実家に住んでいる。それなのに餓えているというのは、どういうことかと聞いたら、“派遣の仕事なので仕事があいてしまう、その間、実家に居るとともに働いていないとみなされ、家族から台所を使うことを許されなかった”ということでした。彼の父親は、官僚で“働かざる者、食うべからず”を徹底しているそうです。彼は、極めて自殺願望が強く、

最初から“死にたい、死にたい”と言って相談に繋がるまで2ヶ月かかっています。

＜貧困＞とはどういう状態なのか？→“溜”を奪われ状態

5重の排除というのが1人の人の上に押し重なって起きることによって、人は「貧困」まで追い込まれます。それを“溜”の無い状態と私は言っています。人は“溜”に包まれています。目には見えませんが、皆さん一人一人が持っている“溜”があり、一人ずつ違ってきます。

“溜”とは、何かといいますと、例えば貯金は金銭的な“溜”です。或いは、家族がいる、頼れる親族がいる、友人がいる、これは人間関係の“溜”です。精神的に自信ができ、やれると思える。そういうのが精神的な“溜”です。

こうした“溜”が**5重の排除**で奪われ、小さくなってしまいます。そして人々は「貧困」状態になります。残念ながら“溜”は目に見えません。大きな“溜”を持っている人ほど、やれば何とかなる、今まで自分はそのようにやってきたから、頑張れば何とかなると簡単に思ってしまう。例えば、安倍首相はあのような家庭に生まれて、大変な資産と豊かな友人関係のコネを持って、多分政治家になるまで苦労を殆どしなかった。彼のようなでっかい“溜”を持っている人ほど、自分の“溜”を意識しない。彼は、ああいう世界の家族に生まれたから総理大臣になれたとは多分思っていない。苦労したから今の地位があると思っている。

人間は“溜”のお陰で“今の地位がある”と思いたくない。自分が頑張ったから“今の地位がある”と思いたい、それが人情です。しかし、他人に向かって、誰でも頑張ればできるはずだというのは、相手をいつそう追い詰めてしまいます。先ほどから話していますように企業福祉や家族福祉に守られて生きている人は、それが当たり前だと思っている。それが在るか無いかは、なかなか意識しません。頑張れば何とかなるというのが、そうでない人にも当てはまると思ってしまう。

学校の先生、福祉事務所の職員、或いは労働者とか援助職の人達と話をしますが、そういうプロの人の中には相手の“溜”が見える人と見えない人がいます。例えば学校に来る子供は一人ひとり家族の経済状況や家庭環境が異なっているわけです。“頑張って勉強すれば何とかなる”だけでは済まされない問題を抱えています。一人ひとりが持っている“溜”が見える、というのがいわばプロの援助者です。ケースワーカーも同様で、生活保護を受けている人に、“いつまでも甘えていないで頑張って仕事しなさい、死に物狂いになれば仕事は見つからないことは無い”と言っても意味が無い。つまり“溜”が無いために、まず“溜”を大きくしてからでないと、そのことが現実的な選択肢に入らない、ということが分からないと、それは説教とか脅迫にしかならないし、実効性を持たないことになります。なかなか“溜”が見えないところに問題があります。

非正規のフリーターが労働組合に相談にいったらそんなところで働くお前が悪いと言われたというのも同じ事です。

＜貧困＞から見えるもの

「貧困」をこのようにとらえ、「貧困」を考えると、見えてくるものがあると思っています。ポイント3つだけあげます。

1つは、「貧困」とビンボーです。「貧困」とビンボーは違います。ビンボーというのは、お金が無い、しかし、お金が無くても豊かな人間関係を持って幸せに暮らしている人がいます。脱サラして家族で楽しく田舎暮らしをしている人がいます。ですが、貧困というのは、単にお金が無いだけでなく、お金も無ければ人間関係の“溜”も無く、精神的にも追い込まれている状態です。だからビンボーでも幸せという人がいますが、貧困で幸せということはありませぬ。テレビ等でビンボーは、よく笑いのタネにされますが、貧困は笑えませぬ。

2つ目は、貧困と格差です。これも区別して捉える必要があります。よく同列に論ぜられますが、格差というのは、違いがあるかぎり何にでもあてはまります。藤原紀香と陣内智則の収入格差が週刊誌のタイトルになっていました。格差という言葉として使い方は間違っていない。2人の収入は違うのですから。

貧困というのは、違いがあるかないかは関係がありません。例えば皆が等しく貧困な社会ということはありません。その社会には格差はないかもしれないが、膨大な貧困がある。

格差と貧困の2つは別々のカテゴリーで、別々の意味を持った言葉です。格差はあって良いか悪いかの議論になります。小泉首相や経済界は、格差があっても良いじゃないかといっていました。今でもそうです。活力ある社会のためには、ある程度の格差は必要だとかいう発言もあります。年収800万円の人と1000万円の人がいても良いだろう。誰もが年収800万円だったら頑張る気が起きないでしょう、“そんなのは社会主義ですよ！”と言われてます。このとき、貧困の問題は入っていないのです。もちろん格差を問題にし、批判する人は、貧困にいきつく格差の拡がりそのものを問題にしているわけですが、ここがはっきりしていないために、ある種の水掛け論になってしまう。つまり、格差があっても良いか悪いかの議論になってしまう。

しかし、貧困はあって良いか悪いかの議論にはなりません。貧困は在ってはいけないと云うのが世界的な合意なのです。例えば、安倍首相が“活力ある社会のためには、ある程度貧困は必要だ”と言え、彼は国際的に叩かれます。というのは貧困を解決するのが政治家の重要な仕事のひとつであります。これは世界の常識だからです。

つまり貧困というのは、在っても良いか悪いかは議論になりません、在るか無いかだけです。我々は、ここにも貧困があるじゃないか、あそこにもあるじゃないかと示すことによって、政治的な失敗を問うことができます。問題の所在が極めて明らかになるという意味で、私は格差の問題を、むしろ貧困の問題として話したほうがスッキリと思います。多くの人が問題としている格差とは、例えば“フリーターの収入が年収

150 万円に満たない”といったことです。これは貧困の問題です。

3 つ目は、貧困と自己責任です。自己責任論はどういう所で成り立つのか、前提を考えてみる必要があります。自己責任論の前提は、貴方にも選択肢があったはずだ、例えば、“貴方は A も B も選べたはずなのに貴方は敢えて B を選んだ、その結果は貴方が引き受けなさい”というのが自己責任論の前提です。

その人が A しか選べなかったとしたら誰もその人のせいだと言いません。なぜならその人には選択の余地が無かったのだから。

過労死も自己管理の問題といった奥谷禮子氏の発言があります。彼女は、経営者は誰も死ぬまで働いてくれとは頼んでいない、会社を休めたはずなのに休まなかったのは、本人の責任だから、休まなかったことによって起きた責任の結果は自分が負うべきだと言っています。他方で、自分達経営者が非正規雇用を 600 万人増やすことを選択したのは止むを得なかった、自分たちの自己責任には当てはまらない、グローバル化の流れの中で日本経済が生き残るためにはこれしか選択が無かったという論理です。私たち経営者には選択の余地が無かった、経営者は別に労働者を使い捨てにはしない、むしろ労働者の生活を守るためにこれ以外の選択はなかった、自分達には責任は無いというのです。

貧困とは選択が狭まるということです。例えば、明日生きるお金が必要な人は、正規の仕事か非正規の仕事か、選ぶことはできません。1 ヶ月後に入る 10 万円や 30 万円のお金よりも、彼に必要なのは今日の 5,000 円です。その人に選択の余地は無いのです。貧困というのは、そうやってどんどん可能性の範囲が狭まっていくことです。これはノーベル経済学賞を取ったアマルティア・センの言っていることです。

つまり、貧困までに追い込まれた場合、自己責任論を問えない。まず、その状態を解消してその生活保障をし、その生活保障を通じて貧困状態を解消し、その上で貴方はどうやって生きるかということを初めて問うことができるのです。そうしなければ自己責任論は適用できません。それが貧困と自己責任論との関係です。自己責任論というのは、貧困の前では立ち止まります。

時間がなくなってきましたので、最後にこうした状態に対して、自分達は何ができるかについて話していきたいと思います。

最低生活費を知る

難しい議論の前に、まず、最低生活費を知りましょう。皆さんは自分の家族の最低生活費をご存知でしょうか？ 静岡県 lowest賃金の額は、多くの人が知っているでしょう。最低賃金は、労働の場面しか規制していません。しかし最低生活費は、生活を丸ごと規制しているお金なのです。例えば、最低賃金以上の仕事で働いていて日給月給でろくろく仕事がまわらなくて全体にならしたら最低生活費以下という人が山ほどいます。だからワーキング・プアと言われています。

最低生活費というのは、年金やパチンコで勝ったお金も、拾ったお金も全部入れて、その上で、その収入を下回ったら国が責任を持ちますよという金額です。憲法25条で保障されている「健康で文化的な生活」とは、このラインに達していることを指しているのが最低生活費です。ところがこの最低生活費を殆どの人が知らない。これは何が「貧困」かを知らないということです。殆どの人が最低生活費を知らない社会では、貧困の議論は具体的にならない。貧困が大変な世の中になっているらしいというだけで具体的な話に入っていけない。

なぜ、こうまで最低生活費について鈍感な社会になってしまったのか、2つの原因があります。

1つは、隠されているからです。最低生活費というのは何も秘密資料ではありません。福祉事務所の職員は、毎年4月に新しい最低生活費の基準額を厚労省から知らされています。8月には『生活保護手帳』として出版され、一般でも入手できます。だけど、それを知ろうとする人々に知らせる努力が行われていない。例えば、市の広報で「貴方の家庭の最低生活費を計算してみましょう」と計算式を載せたことがない。自治体のホームページに“こうすれば貴方の最低生活費が計算できますよ”という計算方法が載ったことがない。私は、今全国の自治体のホームページ調査をやって、1,800の自治体で最低生活費がどう扱われているか調べています。計算式の載っている自治体はおそらくゼロです。

隠されている。周知されていないのです。しかし、他方、我々の側も関係ないと思っています。生活保護を受けている人にしか関係ないと思っています。たとえてみるなら、自分は家の中に住んでいるが、生活保護を受けている人は家の「外」の人であり、家の「外」の人がどうであろうと、自分の生活には関係ないというとらえかたです。

ですが生活保護の基準は、最低生活費ですから、あらゆる数字にリンクしています。就学援助費が話題になっています。東京23区では生活保護基準の1.1倍～1.3倍の収入の人までが受けられます。つまり、生活保護基準が下がれば、就学援助費を受けられる基準が下がることになり、就学援助を受けられない人が増えることになります。

国民健康保険料の減免基準、公営住宅家賃の減免基準も、また、ご存知の通り、最低賃金も生活保護基準に連動させるということになっています。

生活保護の基準は、家の「外」の話ではなく、家の「土台」の話です。ここが揺らげば、家全体が揺らぐ、ここが沈めば家全体が地盤沈下を起こすのです。決して他人事ではないと知ることから、貧困の問題を考えていくことです。因みに『貧困襲来』の本には生活保護費を自動的に計算できるソフトが付いています。このCDをコンピュータにに入れて、居住地、家族構成、年齢などを入力しますと、最低生活費が分かるようになっています。こうして具体的な金額についての会話が当たり前にならないと、なかなか貧困の議論が先に進んでいきません。これが第1点目です。

第2点目は「つなぐ」「つなげる」ということです。例えば、種本氏の話にありまし

たように労働相談を受けて、労働争議が持ち込まれたとき、それを解決するまでどうやって生活を立て直していくのかということにぶつかります。労働の問題と生活保障の問題が切り離せなくなっています。首都圏青年ユニオンの河添書記長とよく話すのですが、“団体交渉をやります”といった時に、“行きたいけど団体交渉に行く交通費がない”という声が多いそうです。労働問題の中で、貧困問題にぶつかることが珍しくなくなっています。

多重債務の問題も同様です。弁護士、司法書士さんたちが、多重債務問題に一生懸命に取り組んでいます。ある弁護士がしみじみ言っていましたが、ヤミ金問題を一生懸命やってきた、だけど何度解決しても、また借りてくる。自分はその人をだらしのない人だと思っていた。しかし、段々に生活そのものが成立っていないことが分かってきた。ヤミ金をいくら解決してもマイナスの家計がプラスにはならない。マイナス家計を何とかプラス家計にする生活の問題に手を付けなければ、ヤミ金の問題も充分解決できない。

いろいろな分野の個別の問題の背後に、貧困の問題があります。例えば、児童虐待が起こる家庭というのは、そうでない家庭と比べると経済的な所得が低い。虐待という個別の問題だけを見ていると貧困が出てきません。とんでもない親が増えたとか、最近の若者は、と言って片付けてしまいます。しかし、様々な問題を入口にして貧困の問題に「出会う」、「出会える」、「出会わざるを得ない」。

だからこそ「反貧困ネット」は、様々な分野で活動している人達が横に「つながる」のです。資料の写真に載っている人達、宇都宮健児弁護士（多重債務問題で活躍）、赤石氏（シングルマザーで活躍）、尾藤弁護士（生活保護問題）、川添氏（首都圏青年ユニオン書記長）、障害者や難病の会等いろんな人達が貧困の問題にぶつかってきましたが、それぞれの問題で手一杯であり、それぞれの分野で貧困の問題を前面に出すことが出来なかった。だからこそ共通の問題を取上げるためネットワーク作りを進めています。

それは当事者側から見れば当たり前です。夫の暴力から逃げ出して母子家庭となったが、日雇い派遣では生活していけず、生活保護の申請をして断られ、止むを得ずサラ金に手を出して多重債務になってしまった。こんな人はいくらでもおられます。DV問題なのか、労働問題なのか、生活保護問題なのか、多重債務の問題なのか、こういう分類は本人にとって意味がありません。本人にとって一番大事な問題は、どうにもならなくなってしまった生活を立て直したいということです。それに応えられる基盤を、受け皿を作らなければ。その人達は、関わってきてくれません。そういうネットワークを作る必要があります。

首都圏青年ユニオンの河添氏や派遣ユニオンとよく話をしますが、川添氏と今度は若者の共済的なグループを作ることにしています。労働組合に入るにはちょっと敷居が高く、労働組合のコアメンバーになるにも敷居が高いという若者に、共済的なネットワークを作って、相談にのれる受け皿にする計画しています。派遣業のことでは、組合（ユニオン）作りと一緒にやっていく、問題のある会社と一緒に叩くことにしています。

現場でやっていると若い人達は政党の縛りを気にしていません。ところが上に行くほど気にする。上の人達から了解を得られないので、現場で政党の縛りなしに直接付き合っている人達が非常に動きづらい思いをしています。今日は組合の偉い人が参加しているかもしれませんが、現場の動きにどうか水を注さないで下さい。

現場でつながっていかないと、それぞれが弱いから、何とかつながってこうという思いがあります。どの組合も数十人から数百人です。あれほど騒がれています首都圏青年ユニオンも数十人です。系列を問わずにつながつて、問題を社会化していく機会を作りたいと思っています。どうしても気軽に言える雰囲気にならない、場合によっては、つながりを妨げられることがあります。運動全体にとって障害になります。

最後に「反貧困ネットワーク」のロゴの説明です。これは何を現しているか分かりますか。おたまじゃくしではありません、お化けです。何故お化けかと言いますと、貧困というのは、「ある」と「ない」との間にあります。それでキャラクターはお化けです。ヒンキーと呼んでいます。このヒンキーには物語がありまして、世の中の人々があまりにも無関心でいますと、怒ってどんどん大きくなっていき、逆に世の中の人々がヒンキーに気遣ってどうしようか、あの手、この手で試行錯誤しながらヒンキーに手をかけると安心して成仏していきます。ということで、貧困の問題の最大の敵は、無関心です。まず、貧困を可視化することです。可視化することでネットカフェ難民も政府はそれを知りませんとはいえなくなります。このような人達がいる以上、何とかしなければいけないという大前提になります。つまり、此处にも、あそこにも存在することを実態で示していくことが、そのまま政治的に関心を呼び起こすことになります。

私は、普段は東京で活動していますが、何かあれば皆さんと一緒にやれることを探していきたいと思います。

ご清聴、有難う御座いました（拍手）